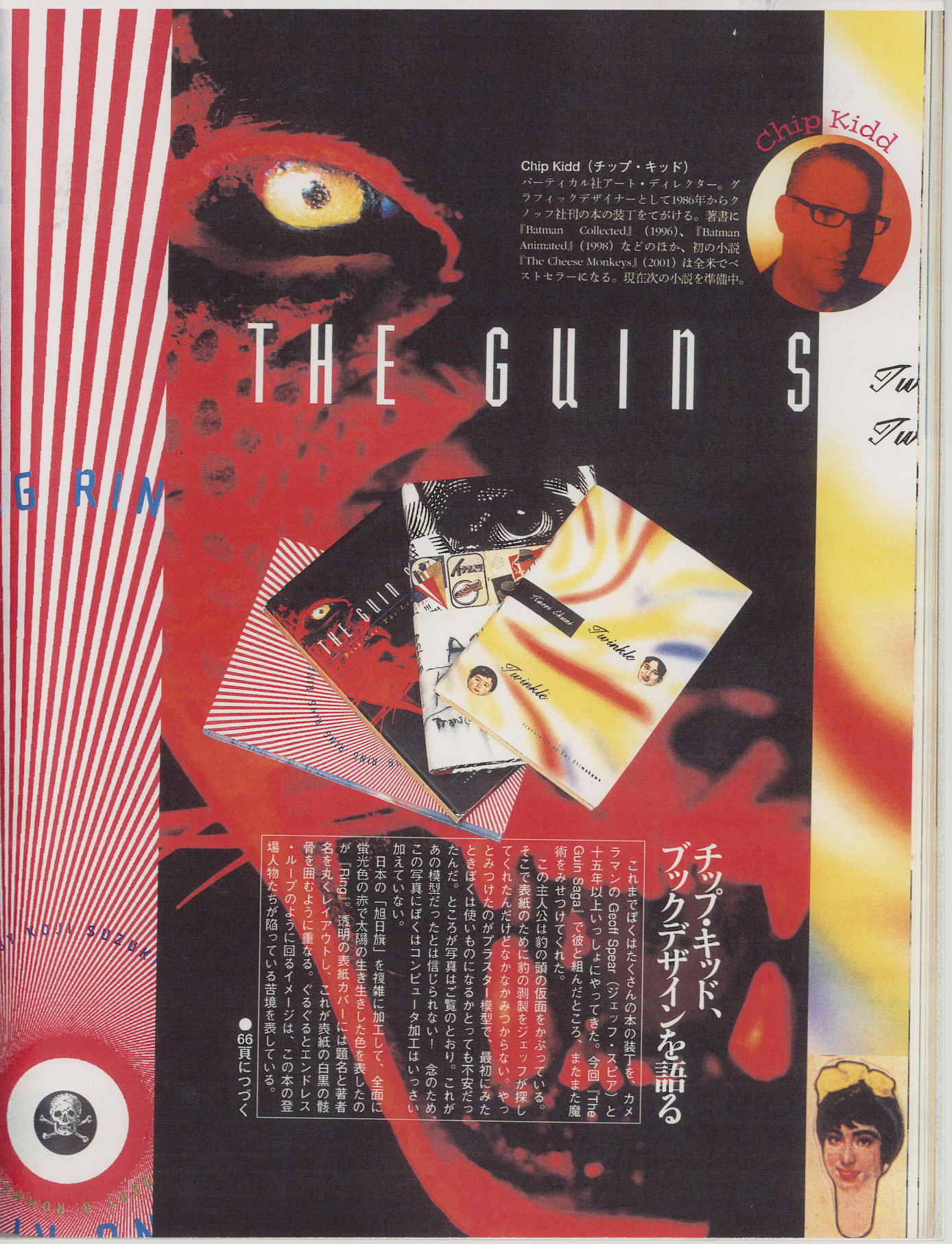


Chip Kidd（チップ・キッド）
バーティカル社アート・ディレクター。グラフィックデザイナーとして1986年からクノッフ社刊の本の装丁をてがける。著書に『Batman Collected』（1996）、『Batman Animated』（1998）などのほか、初の小説『The Cheese Monkeys』（2001）は全米でベストセラーになる。現在次の小説を準備中。

チップ・キッド、ブックデザインを語る

これまでぼくはたくさんの本の装丁を、カメラマンのGeoff Spear（ジェッフ・スピア）と十五年以上いっしょにやってきた。今回『The Guin Saga』で彼と組んだところ、またまた魔術をみせつけてくれた。

この主人公は豹の頭の仮面をかぶっている。そこで表紙のために豹の剥製をジェッフが探してくれたんだけどなかなかみつからない。やっとみつけたのがプラスター模型で、最初にみたときぼくは使いものになるかとっても不安だったんだ。ところが写真はご覧のとおり。これがあの模型だったとは信じられない！　念のため、この写真にぼくはコンピュータ加工はいっさい加えていない。

日本の「旭日旗」を複雑に加工して、全面に蛍光色の赤で太陽の生き生きした色を表したのが『Ring』。透明の表紙カバーには題名と著者名を丸くレイアウトし、これが表紙の白黒の骸骨を囲むように重なる。ぐるぐるとエンドレス・ループのように回るイメージは、この本の登場人物たちが陥っている苦境を表している。

●66頁につづく

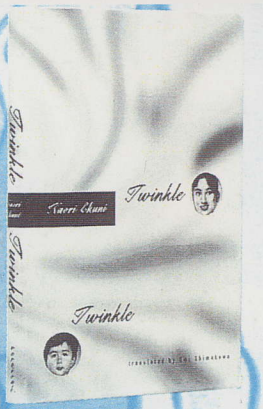
日本小説を米国に輸出する

――ニューヨークで出版社をはじめるには

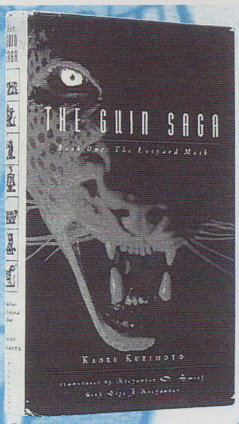
酒井弘樹（バーティカル社社長）

米国で一般的に知られている日本の現代作家は、村上春樹と吉本ばななの二人だけである。村上氏は独力で自分の作品を米国で翻訳出版する仕組みを作り上げ、吉本氏はイタリアでの人気を引っさげて英語圏デビューを成功させたわけだが、この二人のケースは特別扱いにするべきだろう。英語の本が日本語で翻訳出版される仕組みと比べると、まだまだ個人技の域を出ないからだ。

「日本は英語の本を翻訳出版するばかりで、海外に送り出すことは少ない。純文学だけでなく、世界に通用する大衆小説やエンタテインメントはたくさんあるはず」と感じている日本人は多いと思う。ただ、悲しいかな、仕組みがなかった。そこで私たちは、日本の現代小説やノンフィクションを米国で継続して紹介していくために、ニューヨークに出版社、バーティカル（Vertical）を設立した。デビューとなる二〇〇三年春のラインナップは、『Twinkle Twinkle』（江國香織「きらきらひかる」）、『Ashes』（北方謙三「棒の哀しみ」）、『The Guin Saga』（栗本薫「グイン・サーガ」第一巻）、『Ring』（鈴木光司「リング」）の四点。続いて秋に八点、二〇〇四年には二十点を出版していく予定だ。



『Twinkle Twinkle』



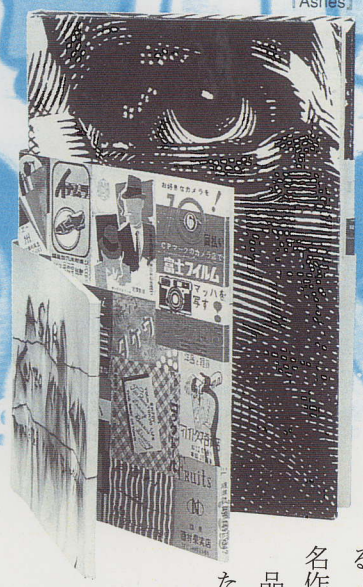
『The Guin Saga』

『Ring』

『Ring』と同じように二層のデザイン・アプローチをしたのが『Twinkle Twinkle』だ。この本の登場人物は、アル中や同性愛者としてそれぞれシークレット・ライフをおくっている。その暮らしを、一九六〇年代の日本の紙人形を素材にしてデザインし、それをおおい隠すように表紙カバーをつけた。二つの穴から、下に広がるもうひとつの世界のほんの一部がのぞいている。

二〇〇一年に東京で古いマッチ・ラベルのスクラップブックを買ったんだけど、『Ashes』を読んだとき、ああこの本のデザインに使われる運命だったんだなと思ったね。

この装丁は、大きさの違う表紙カバーを二枚かけたような三層構造にした。主人公は中年のヤクザで、バーに入り浸る一匹狼。幸せなやつじゃない。いきつけのバーのナプキンに書いた彼の文字が、こぼれた飲み物でにじんでいるのが一番外側だ。二層目に、この作品のタイトルAshes（灰）にちなんで、マッチ・ラベルを並べている。三層目は主人公の顔。青を使ってまさに「ブルーな気分」の一冊にした。



『Ashes』

翻訳出版の落とし穴

よく聞かれるのは、なぜこの事業を始めようとしたのか、ということだが、実を言うと私は、米国に渡った当初、日本人作家を世界に紹介したいという意気込みは強かったものの、出版社そのものをやるということは考えていなかった。自分が自信をもって選んだ作品を英語にして、それらを米国の出版社に売り込もうと考えていたのである。ところが、このモデルには大きな落とし穴があった。

現在の私たちが最も大切にしている点とも重なるので詳しく述べたいのだが、まず、どの作品を選ぶかということに関して私がプロフェッショナルでなかったということだ。折に触れてアドバイスをもらえる米国人の大学教授もいたが、最終的な判断が私にかかっているのでは、的確な判断は無理だったのである。もちろん、日本でベストセラーになったとか、有名作家というだけでなく、米国市場で競争力のある作品を選ばなくてはならないということは分かっていた。だが、本当にそれを判断するには、人種や宗教、民族問題、思想や哲学などに関する高い教養が必要であることが分かっていなかった。

たとえば、自殺や中絶の問題を扱った小説があり、それをキリスト教国である米国で出版しようとすれば、最終的に作品にどう投影されるかは別

にして、そこには神との関係における問いかけが不可欠となる。日本語で書かれた小説の場合、致し方のないことなのだが、その点に無関心な作品が多い。

バーティカルで作品の選択と英語のクォリティ・コントロールを担当しているのは、編集長のイオアニス・メンザス君。彼はコロンビア大学博士課程修了の逸材で、端的に言えば、彼が仲間に加わったことによって初めて、出版社としてスタートすることが可能になったのだ。今から思えば、私が中心だった頃の作品選択には独りよがりが多かったし、英語の原稿チェックも不十分だった。何より、作品が本当に出版されるかどうか未定の段階で、翻訳者に対して最高の品質の英文を要求することに無理があった。

最初の読者は仕事のパートナー

もう一人、大事な人物との出会いがある。バーティカルのすべてのブックデザイン、ポスター、コーポレートロゴ等のアート・ディレクションを引き受けてくれたチップ・キッドだ。米国では、例外はあっても基本的に一度は書店が本を買い取るため、バイヤーを惹きつけるブックデザインの重要性は高い。そして、チップ・キッドこそは「八〇年代後半から九〇年代にかけて米国のブックデザインの世界に革命をもたらしたデザイナー」と評され、米国の出版界では知らぬ者がいない存在。出版関係者から「どうやって彼を口説き落としたのか？」と聞かれることも再三である。

チップ・キッドとの縁に関しては、私たちが今年秋から順次刊行予定の手塚治虫の『ブッダ』の存在が大きかった。彼は、知る人ぞ知るコミック愛好者であり、バットマンやスーパーマンについての本を著者やデザイナーとして何冊も手がけている。当然、日本のマンガ文化にも強い興味をもっており、とりわけ手塚治虫の偉大さを評価してきた。その装丁を自ら手がけることができるということが、彼の心を動かしたわけだ。

また、バーティカルの全米における流通を担うのはナショナル・ブック・ネットワーク社（ＮＢＮ）であるが、当初、周囲の人たちからは、「まだ一冊も本を出していない出版社が、独立系ディストリビューターとしては全米第二位のＮＢＮからＯＫをもらうのは厳しいのでは」と言われていた。ところが、私たちが英語に翻訳した四冊の本を事前に送って交渉に臨んだところ、会議に出席した誰もが、「何よりも、作品が素晴らしい」と言ってくれたのである。

つまるところ、チップ・キッドの場合も同じで、作品の力なのだと思う。いくら米国人に、「谷崎、川端、三島だけが日本の小説じゃない。村上春樹もいいけど、他にも世界に通用する作品はたくさんある」と声高に喋っても、それは作品を一回読んでもらうことに到底かなわない。

なお、これは余談かもしれないが、米国では小説を主体とする出版社を新しく立ち上げることが難しくなっているようだ。大手出版社の寡占化が進み、ベストセラー狙いが使命の大衆小

説の世界で、資金力にモノをいわせたマーケティング活動が不可欠になってしまったこと。そのため、新人作家を発掘する際に重要な役割を果たすリテラリー・エージェントたちの目線も大手出版社のほうを向きがちなこと。有名作家のみならず、新人にも少なくない前払い金を支払うことが当たり前になってしまったこと。さまざまな理由から、一定レベル以上の作品を年間十点以上、それも新人作家の作品で揃える出版社を立ち上げるのは至難の業になっており、その点でもＮＢＮにとって私たちは珍しい存在と映ったようだ。

マーケティングについて言うと、米国では通常、新刊書は発売の四ヶ月から六ヶ月前には仮綴の見本やカタログを作り、それをもって全米の書店や図書館に対して注文部数を積み上げていく。これに広告や書評などの手配が加わって初めて、一冊の本を、バーンズ・アンド・ノーブルやボーダーズなどの大型チェーン書店をはじめ、全米の書店で売るための態勢が整う。この分野は現在、バーティカルのマーケティング担当であるマイカ・バーチ君が、ＮＢＮの営業マンたちと協力しながら新しい市場の開拓に励んでいる。

米国の主要書店で売るということに関して、私たちは二〇〇三年秋、手塚治虫の『ブッダ』で、新しい試みを行おうとしている。

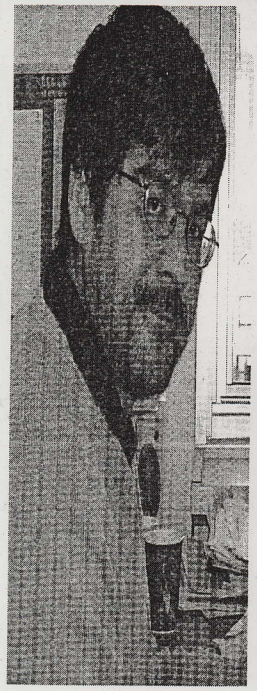
というのは、確かに日本のマンガは米国でも数多く出版されているが、そのほとんどは西海岸中心に、一部の愛好家やマニア向けに売られているのが現状である。作品も子ども向けのものが大多数で、大人も読めるストーリー性の高い作品は少ない。

デザインや製本の面でも、それは点数を多く出すためには仕方のないことなのだが、たとえば米国人が自然に読めるように、右開きから左開きに直していないものがある。直していたとしても、版を裏返して使うため、登場人物は皆左利きで、ストーリー展開でも不自然さがつきまとう。吹き出しの中以外の、絵の中に組み込まれた擬音語や擬態語が日本語のままのケースもある。つまり、流通の問題も含めて、一般の大人の米国人が手に取って読んでみようと思う仕組みにはなっていないわけだ。

『ブッダ』は手塚治虫晩年の傑作であり、きわめて訴求力の高いテーマ性とストーリー性を併せもっている。私たちはこの約三〇〇〇頁の作品を、ハードカバー八分冊、左開きで、米国人が自然に読めるように、本文中のデザインも一部組み変えて出版する。流通においても、全米の一般書店で、小説の新刊と同じように平積みで売られる態勢を作っていく予定だ。手塚プロダクションの松谷孝征社長によれば、それは、手塚さんが生きている頃からの夢だったという。

日本らしさを売りにしない

日本の出版界は、九〇年代半ばまで一貫して右肩上がりの成長をしてきた。人口が増え、購買力が高まり、新しい作家がどんどん生まれ、日本語という閉ざされた環境ゆえに一方では壮絶な競争の中で、結果的に膨大な知的資産が蓄えられていった。



Ioannis Mentzas
（イオアニス　メンザス）
バーティカル社編集長。プリンストン大学を首席で卒業後、コロンビア大学の博士課程（比較文学）を修了。30歳。

酒井弘樹
（さかい　ひろき）
バーティカル社社長。中央大学法学部卒業後、日本経済新聞社、日経 BP 社勤務を経て、1998年渡米。41歳。

Micah Burch
（マイカ　バーチ）
バーティカル社マーケティング担当。プリンストン大学、東北大学、ハーバード・ロースクール卒業。弁護士。29歳。

http://www.vertical-inc.com/

実はその蓄積というのは大変なもので、たとえば仮に、私たちの最初のラインナップの一冊『グイン・サーガ』が米国でベストセラーになったとしよう。そのとき、多くの読者は、これを日系米国人が英語で書いた作品だと思うことだろう。豹頭の戦士グインをめぐるこの物語の中に、日本のナショナリティは一切登場しない。日本をイメージさせるのは、著者のカオル・クリモトという名前だけである。

『グイン・サーガ』は、ジャンルで言うとヒロイック・ファンタジーだが、この分野を欧米人は、自分たちの独壇場だと思っている。欧米人が書いた傑作と比べてまったく遜色のないこの作品が実は、日本で生まれ、日本で育ち、日本語で書かれた、女性による作品であることを米国人が知ったとき、日本という国に対するこれまでの見方が、根っこのところで小さく変わることだろう。それは、声高に日本の良さを喧伝するよりも、はるかに意味のあることだと思う。

北方謙三氏の小説は、「棒っきれのように生き、棒っきれのようにくたばる」という主人公のヤクザの生き様を通じ、人間存在の哀しみが浮かび上がる逸品。江國香織さんの作品は、都市に生きる若者の日常生活を彩り鮮やかに描いた、詩のような恋愛小説。鈴木光司氏の『リング』は、米国で完全リメイク版の映画が作られたジャパニーズ・ホラーの代表作。

私たちはいずれの作品においても、世界に対して日本人作家の競争力を示すことができると確信しているが、同時にこの事業を通じて、文化や思想の根源としての活字の世界において、日本と欧米の情報偏差が少しでも埋まることになれば幸せだと思っている。

と、以上のように大所高所的に語ることもあるのだが、本当のことを言ってしまおう。私たちにとってのエネルギーの源は、初めて英語で出版されるということで作家の方々が喜んでくれる、ただただ、それだけのこと。

本とコンピュータ 2003 春号